

IV-388

歩行者流動に着目したサインシステムに関する一考察

足利工業大学大学院 学生員 高山 康弘
足利工業大学工学部 正会員 中川 三朗
足利工業大学工学部 正会員 為国 孝敏

1. はじめに

わが国の大都市における鉄道ターミナル駅は、複数の鉄道事業者によって構成されていることが多く、また、鉄道路線の結節時期の推移から結果としてターミナルとなった駅がほとんどである。そのため、駅舎や駅前広場を含む駅空間そのものが複雑な構成となっている。また一方で、現在の鉄道ターミナル駅は、その存在自体が都市空間としての役割を有しており、かつ大量の歩行者交通が発生・集中することから、都市機能との一体化が求められるようになってきている。そこで、こうした鉄道ターミナルの駅空間を利用する歩行者のための、案内、誘導といったサインシステムのあり様が今日的な課題となっている。

そこで本研究では、大都市の鉄道ターミナル駅におけるサインシステムのあり方を探る端緒として、新宿駅西口地下広場を対象に、現状のサインシステムの実態を把握するとともに、サイン周辺の施設(以下、周辺施設)および歩行者流動との関係から課題について考察することを目的とする。具体的には、新宿駅西口地下広場におけるサインシステムの設置形式について考察を行い、さらに各鉄道事業者の改札口から西新宿方面へ向かう歩行者を対象に追跡・観察調査により歩行者流動を割り出し、設置位置について考察を行うことを目的とした。

2. 調査地域の概要

西新宿方面に向かう歩行者の起点となっているのが新宿駅西口地下広場(以下、地下広場)である。地下広場

は1966年に完成し、JR線西口、小田急線、京王線の改札口と隣接しているほか、地下鉄の丸ノ内線、都営新宿線乗降客のコンコースとなっている(図-1)。

また、地下広場から4号街路までは地下部であるが、さらに西新宿方面に向かうとそのまま地上部となる構造になっている。

3. 地下広場での実態調査

(1) サインシステムの現状

地下広場でのサインシステムの現状を調査した結果を、図-2に示す。調査結果からサインを分類した結果、この地下広場のサインには、二つの性格を持つことがわかった。

一つは、歩行者の現在地とその周辺関係を把握させる性格を持つタイプで、これは、いわゆる案内サインとして分類できる。地下広場では、地図による情報提示が使われており、設置形式は壁(図-2.a)や柱(図-2.b,g)に直接設置されたものと自立しているもの(図-2.d)が見られた。

もう一つは、歩行者をさまざまな方向へ導く性格を持つタイプで、これは、いわゆる誘導サインとして分類できる。地下広場では、文字と矢印による情報提示が使われており、設置形式は天井から吊り下げられたもの(図-2.e)や壁に直接設置されたもの(図-2.c)、柱から突出しているもの(図-2.f)が見られた。

(2) 歩行者流動

地下広場での追跡・観察調査を基に、各鉄道改札口から西新宿方面へ向かう歩行者流動を図-3に示す。この中で、A、B、C、Gゾーンは柱や壁による半閉口空間として、またD、E、F、Hゾーンは車道空間による半開放空間としての特性を有している。

図-3から分かるように、A、B、C、Gゾーンでは歩行者流動は比較的単純に分離する現象が見られることが分かった。一方で、D、F、Hゾーンでは歩行者流動は複雑に交錯する現象が見られることが分かった。また、Eゾーンでは歩行者流動の集中現象が見られることが分かった。

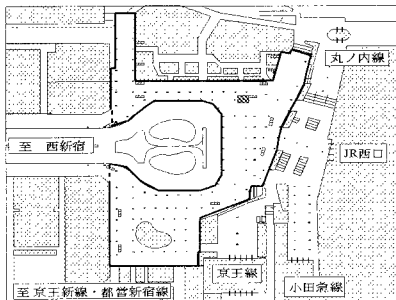


図-1 新宿駅西口地下広場

キーワード：サインシステム, 歩行者流動

〒326-8558 栃木県足利市大前町268-1 TEL 0284-62-0605 FAX 0284-64-1061

4. サインシステム分析

地下広場の現状から得られた2つのタイプのサインと、調査結果から得られた周辺施設および歩行者流動との関連について分析を行った。分析の視点は、周辺施設とサインの設置形式との関係、歩行者流動と設置位置の関係とし、その中で課題の抽出を行った。

(1) 設置形式での視点

案内サインについては、通路の壁に沿って施設がない場合には壁付型（図-2.a）となり、きつぷうりばやテナントといった施設がある場合には、柱付型となる（図-2.b）。また、タクシーのりばやシャトルバスといった施設のある車道空間による半開放空間では自立型や柱付型となる（図-2.c,g）。

以上のことから案内サインの設置形式については、施設の有無に関係していると考えられる。

誘導サインについては、周辺施設との関係は見られなかった。むしろ、コンコースの構造に関係があると考えられる。

(2) 設置位置での視点

案内サインでの課題は次のとおりである（図-3）。

- ①B,Gゾーンでは改札口を出た歩行者が地下広場に入っても案内サインが設置されていないので、地下広場全体や西新宿方面の把握がしにくい。
- ②Dゾーンでは、丸ノ内線やJR西口、小田急線からの歩行者が現在地や西新宿方面の確認がしにくい。
- ③Hゾーンにおいては、京王新線・都営新宿線からの歩行者の分岐点となっているが、地下広場全体を把握しにくい。
- ④JR線西口の改札口付近には案内サインが設置されていないため周辺の状況が把握しにくい。

以上のことから、こうした箇所に案内サインを設置することが望ましいと考えられる。

誘導サインについては、多くの交錯現象の起きているD,E,Fゾーンに重点的に設置されており、また、A,Hゾーンでは、数は少なくとも歩行者流動に沿った位置に設置されている。

すなわち、地下広場での誘導サインの設置位置については、特に課題はないと考えられる。

5. おわりに

本研究では新宿駅西口地下広場を対象に、各鉄道改札口から西新宿方面への歩行者流動に着目し、サインシステムの現況把握と課題について分析し、考察を行った。

その結果、サインの設置形式はその周辺施設と関係し、

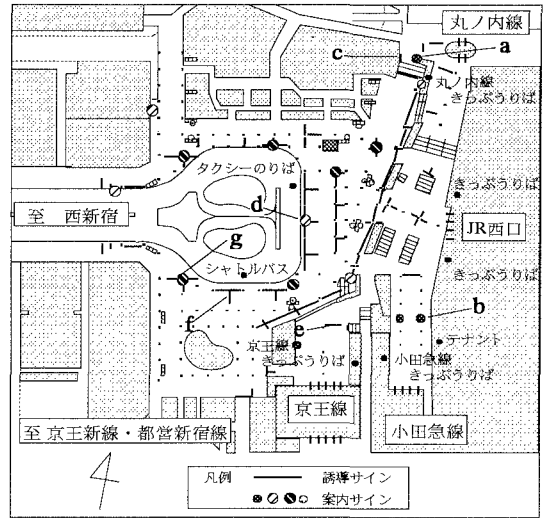


図-2 サインシステムの現状

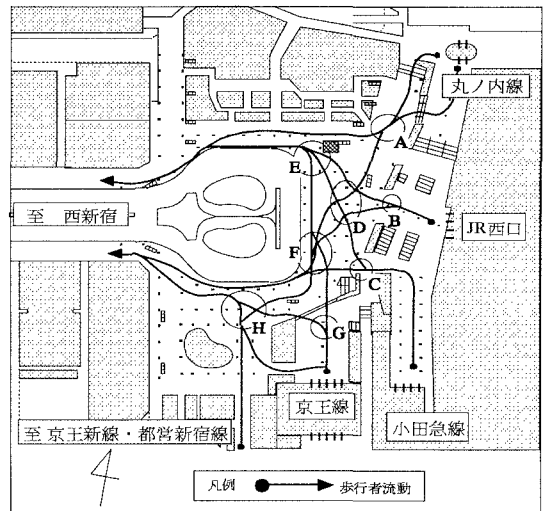


図-3 歩行者流動調査結果

サインの形式を考える上において周辺施設の重要性について指摘できた。また、設置位置について、西新宿方面への誘導サインは全体的に歩行者動線に従って設置されているが、案内サインは数箇所課題を抽出することが出来た。特に京王新線・都営新宿線から来る歩行者への案内やJR線西口の改札口付近での案内が欠けていることが指摘できた。

今後は、歩行者特性を加味した分析を試みる。

謝 辞

本研究を進めるにあたって、黎デザイン株式会社代表取締役赤瀬達三氏に、貴重なご助言・ご指導を頂きました。ここに記して謝意を表します。